

振付家ゴー・チューサン

ヤング靖子

シンガポールとバレエ、この二つを結びつけるアジア人で最初に欧米のバレエ界に認められたシンガポール人、振付家ゴー・チューサン (Goh Choo San 吳諸珊)をご存知でしょうか。国力を高めたシンガポール政府が芸術に力を入れ始めた時、チューサンは既にこの世にいませんでした。文献等でその足跡を知ることは出来ても、活躍の場が欧米だったため、実際の活躍を目にした人はごく僅かです。

チューサンは10人兄弟の末っ子として1948年に生まれました。両親は伝統的な華人の価値観で子ども達を育てましたが、バレエ好きの姉達の影響で、チューサンも踊りを身近に感じ育ちました。姉のスーニーは英国のロイヤルバレエスクールに留学後、1958年シンガポールバレエアカデミーの共同創立者となり、チューサンは年の近い姉スーキムと共にここでバレエを学びます。因みにスーキムは、その後アジア人として初めてオーストラリアンバレエスクールに入学を許可され、帰国後シンガポールバレエアカデミーの校長に就任しました。チューサンはシンガポールで最古の歴史を誇る名門男子校ラッフルズインスティテュションに進みましたが、バレエに情熱を燃やす息子に対して、華人の父親は進学を強く希望したため、シンガポール大学(シンガポール国立大学の前身)に進学し生物化学の学位を取得します。そして卒業後の1970年、両親を説得しプロのダンサーとしての道に進むため母国を離れヨーロッパへ向かいました。アジア人のダンサーがプロとして欧米に行くことはほとんどない時代であり、有名なバレエ団でアジア人を採用するのが非常に稀な時代に、これは大きな決断でした。

ヨーロッパへ飛んだチューサンは、幸運にもオランダ国立バレエ団に採用されます。このバレエ団はクラシック作品、20世紀の巨匠バランシンの作品、そして専属振付家によるコンテンポラリー作品と幅広いレパートリーを持っており、様々なパートを踊る事がチューサンには大きな経験に



ゴー・チューサン



オランダ国立バレエ団でバランシンの作品を踊るダンサー時代のチューサン



シューベルトシンフォニーのリハーサルの様子

なったことは想像に難くありません。そのような環境の中でチューサンはダンサーとしてリーディングソリスト(主役級の踊り手)まで登りつめる一方、振付家としても頭角を現しはじめます。踊り手としての確かな技術と頭の回転の早さ、音楽を正確に理解する能力は、振付にもいかに発揮され、ダンサーとしての活動の傍らワークショップで小品を発表していきました。海を越えてアメリカのワシントンスクールオブバレエのディレクターをしていたメアリー・デイはその才能に注目し、1976年に彼を新設されたワシントンバレエ団へ招聘します。ここでチューサンは振付家として完成度の高い作品を次々と発表していきます。今も上演されるDouble Contrasts、Fives、Birds of Paradise等はこの時期の作品です。やがてアメリカ各地のバレエ団のディレクターの間にその評判が広がり、振付の依頼が舞い込み始めます。ロシアから亡命した名ダンサー、パリシニコフの依頼でConfigurationsを作ったのもこの頃です。東洋文化の影響を受けつつ、クラシックバレエの要素をちりばめた作品はアメリカの批評家の間でも高い評価を受けました。ちなみに、昨年上演されたロミオとジュリエットは1984年にボストンバレエ団のために作られた作品で、初演後の地元の新聞は「古典的な美しさ、多層に渡る劇的なムードの構築において、ゴーの振付はシェイクスピアを舞台に再現している。まるでルネサンスの名匠が描く作品のようで、各シーンが壮麗な絵画のように仕上がっている」と絶賛しました。チューサンはワシントンバレエ団をベースにコンスタントに作品を発表し、その独創的な作品により同バレエ団は創立後、短期間で世界的にも注目されるバレエ団に成長しました。ワシントンポスト紙は、チューサンが「ワシントンバレエ団を彼自身のジェット気流に乗せ、一気に国際的な地位の高みに引き上げた」と讃えています。



シンガポールバレエアカデミーにて
左からチューサン、スーキム、お母様、1人おいてスーニー

ワシントンバレエ団は1982年初めてシンガポール公演を挙行し、シンガポールアートフェスティバルでチューサンの作品を上演しました。母国シンガポールの人々にとって初めてチューサンの作品を観る機会となったこの公演の反応は極めて良かったそうです。この時期作られたShubert SymphonyやUnknown Territoryは今でも人気の作品です。Unknown Territoryは許嫁同士が結婚式で初めて会う伝統を基にして、若い男女の心の動きをタテ糸に、東洋の因習を横糸に、原始的な衣装と振付でアジアの架空の国へと誘います。初演はアメリカでしたが、まだ東洋が遠い時代にセンセーショナルだったことでしょう。



「Unknown Territory」
東洋を感じる結婚式の幻想的なシーン



「Schubert Symphony」
チューサンの数少ないネオクラシック作品

こうした海外での成功を称えて、1987年シンガポール政府は芸術家にとって最高の栄誉である文化勲章(Cultural Medallion)をチューサンに贈ります。そして弟の成功に後押しされ、姉のスーキムは協力者アンソニー・テンと共に、シンガポールにプロのバレエ団を作る決心をします。これがシンガポールダンスシアター (SDT)です。海外でバレエを勉強したシンガポリアンの帰る場所を作ることと、チューサンの作品がバレエ団のレパートリーの核となることを願っての設立でした。残念ながら、チューサンは1988年のSDTの旗揚げを観ることなく1987年11月28日にニューヨークで病気のために亡くなります。第一回公演にはチューサン作のBeginningsが上演されました。創立から33年が経ち、7名だったダンサーは40名に増え、レパートリーにはチューサンの11作品が加わり、創立者の願い通りカンパニーのレパートリーの大黒柱となっています。

チューサンは生前、後進の振付家のために財団を作ることを決め、ワシントンバレエで同僚であり親友でもあったヤネック・シャーゲンを芸術監督として後を託しました。Choo San Goh & H.Robert Magee財団はチューサン・ゴー賞という振付家のための賞を設立し、これまでに数多くの才能を育てています。



「Configurations」
製作の様子はテレビドキュメンタリーとして放映された



ワシントンバレエ時代の盟友だったヤネック(現SDT芸術監督)とチューサン

チューサン没後34年が経ちます。シンガポールにはエスプラネードのような素晴らしい劇場が出来、SDTは国際的なバレエ団に育ちました。日本人会の会報で生涯について紹介されると聞いたらチューサンは何と言うでしょう。ヤネックから思い出話を聞きその作品を観ると、今も彼が生きているように感じます。シンガポールにお住いの間に、この不世出の振付家の作品をご覧になってはいかがでしょう。どの作品にも大胆さと繊細さの中に端正な魅力があり、時代を超えて後進のダンサー達によって母国の舞台で生き生きと踊られています。

参考資料:Goh Choo San Master Craftsman in Dance(Janek Schergen/Goh Soo Khim著)、Singapore Dance Theatre
画像提供:Singapore Dance Theatre



関係者が語るシューベルトシンフォニーの魅力についての動画。プリンシパルの内田千裕さんも登場します。



チューサンについてSDT芸術監督のインタビュー動画

著者プロフィール／近況
ヤング靖子

Ambassadors Council of Singapore Dance Theatre

この原稿を書き終えた週は、Made in Singaporeという実験的なスタジオ公演が開かれ、新しい才能が育つ様子にチューサンの遺志が息づいているのを感じました。最近はバレエに限らず対面型のワークショップやミーティングが増え、新しい出会いの一つ一つに春の気配を感じます。